
死神の鎌は知らず知らずに降り下ろされる

黒竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の鎌は知らず知らずに降り下ろされる

【Nコード】

N7938Z

【作者名】

黒竜

【あらすじ】

『死神』に襲われて知らず知らずの内に『死神』になった青年が勘違いされて勘違いする物語です。

始まりは終わりから

宝くじの一等が当たる確率は何億分の一だが

、誰かはその一等を当てるだろう。

同様に乗っていた飛行機が落ちる確率もその程度はある。

どちらも人が生きている内に一回も当たる事が無いことがほとんどだろう。

しかし当たる人には当たるのだ。

宝くじの一等が当たる、

乗っていた飛行機が落ち

る、

そんな幸運や不運に。

俺、柏木遼、がそんな事を考えているのは、

現在の状況に原因があるわけだが残念ながら宝くじの一等が当たるような幸運では無く。

乗っていた飛行機が落ちるような不運にあっているからだ。

それは……「夜に自動販売機に行ったら死神に追われるなんて不運の度を過ぎているだろうが！」

という意味が分からない現状を叫びながら

人がいない夜道を走っている。

『死神』という現実には、普通あり得ない存在を見たことなんてないが、あれはどう見て死神だといえる。

何故なら漆黒のローブに身を包みフードで顔はよく見えないが唯一見える口元は三日月のようにゆがんでいて押し殺し損ねたような笑

い声が聞こえてくる。

何より闇夜に光る白銀の刃を持つ鎌を持っている。

そんな『死神』は宙を低空飛行しながら俺を追ってくる。

追ってくる理由なんて俺を殺す事だろうが、

もう俺の命はもう終わりだと心が叫ぶ。

何せ俺は30分近く全力で走っているが

『死神』は宙を低空飛行しながら楽しむように俺の後を簡単に追ってくる。

さらに『死神』のせいだろうがいくら走っても人は見付からず、どこかの家に入る事も出来ない。

すでに肺は限界で足が止まる。

俺は『死神』の方に向き直り

「なあ死神、そろそろ終わりにしよう。」

と言い、16年間の短い人生を振り返りながら俺はこれから起きる事を受け入れるように腕を広げて笑う。

『死神』も笑いながら俺に近づき鎌を降り下ろす。

そして俺の視界は真っ黒に染まった。

理解不可能

真っ黒に染まった視界。しかし終わりは、いつまでたっても訪れない。

逆に体の感覚が戻ってくるのを感じる。

俺は疑問に思い、ゆっくり目を開ける。 そんな俺の視界に映

ったのは、漆黒の布だった。『死神』が近くにいるのかと驚き叫び声をあげそうになる。しかし映るのは、布だけで『死神』本体は見えない。

急いで布の位置を確認すると俺の腕に漆黒の布があった。

いや正確に言えば体全体に先程まで自分を追っていた『死神』と同じ格好をしていたのだ。さらに近くには鎌が落ちていた。

意味が分からないし理解出来ない。

なんだこの格好は、全身を漆黒のローブに身を包みフードで顔を隠している、そんな人間

は普通はいない。いたらおそらく不審者だ。

誰か信じるだろうか、死神に追われて鎌を降り下ろされたらいつの間にか『死神』の格好で鎌が近くに落ちていたなんて

仮に俺が言われたら信じないだろう。頭がおかしい人だと思うだろう。

つまり誰かにこの事を話すことは出来ない。

それよりもこの鎌は確実に銃刀法違反だろう。

『死神』だったら関係無いだろうが、俺は学生だ。確実に警察の厄介になってしまう。

かといって鎌を放っておく訳にもいかない。

つまり俺は誰にも見付からず漆黒のローブの姿で鎌を持って家に帰り、家族にはばれないように自分の部屋に入りベッドの下に鎌とローブを隠さなければならぬのだ。

そう結論した俺は急いで家へと向かった。

日常は訪れない

朝、俺は昨日あんな事があつたが清々しく起きる事ができた。

理由はわりと簡単でなんと、なんと昨日家に帰つた後ローブと鎌をベッドに隠そうとしたら、ローブと鎌が勝手に消えていったのだ。

理由は分からないが、あれは『死神』が使っていた物だ何がおきても不思議ではない。

つまり俺は完全に『死神』との関係が無くなったのだ。

これほど嬉しい事はない。何故なら命が助かつたのだ。

「俺は今生きている！！」と叫んでしまふぐらいは、

あんな事件は一生に一度あればいい。これからは普通に高校生として生きていけるだろう。俺は清々しい気分毎朝の習慣であるジョギングをするために動き易い格好で外に出る。

そうして軽く家の外を走っていると俺の前に腰まである金髪をなびかせた中学生ぐらいの少女が俺に言いはなつた。

「あなたを神喰いの容疑で拘束します。」

意味が分からない。

彼女はなにを言っているのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7938z/>

死神の鎌は知らず知らずに降り下ろされる

2011年12月27日23時53分発行